



かまてら先生と学ぶこと

副校長 荒井 宏明



立春が近づいてきましたが、春の兆しはまだ遠く、寒さが厳しい季節となりました。令和5年度も、残すところ2ヶ月となり、学校では様々な場面でまとめの時期となりました。かましよう寺子屋（通称：かまてら）も、2月7日が最後となります。

かまてらとは、3年生の中で希望する児童が、毎週水曜日の放課後に、地域ボランティアの方（通称：かまてら先生）と一緒に算数を中心に学ぶ機会です。先日、かまてらで学んでいる3年生の様子を見に行くと、23名の子どもたちが11名のかまてら先生と夢中で学んでいて、図書館中が熱気であふれていました。あちらこちらから、「できた!」「わかった。」という声が聞かれ、どの子どもも「かまてらは楽しい。」「かまてら先生はわかりやすい。」と、口々に感想を述べていました。また、かまてらが今年度あと2回で終わることを伝えられると、「えーっ!」と、残念がる声が一斉に上がり、かまてら先生たちも教える側としての冥利に尽きるといった表情でした。

その様子から私も少なからず驚きがあり、「なぜ、子どもたちはそこまでかまてらが好きなのだろうか?勉強が楽しく感じるのだろうか?」という視点をもちながら、もうしばらく学習する姿を見続けることにしました。すると、2つのことが見えてきました。1つは、子ども一人ひとりが、それぞれの学習の進み具合に合わせて学習に取り組んでいることです。最初は全員で基礎的な課題に取り組んでいるのですが、課題を終えた子どもはかまてら先生に採点してもらい、さらに難しい問題にチャレンジしていきます。江戸時代の寺子屋のように、子ども一人ひとりが自分に合った内容や進度で学習に取り組むことができている、子どもが主体的に取り組むことにつながっているのです。もう1つは、子ども2名程に対して、かまてら先生が1名ついて教えることができていることです。かまてら先生は子どもに寄り添いながら、子どもが理解するまでじっくりと時間をかけて丁寧にヒントを与え、できるまで待っています。そして、できた時には一緒に喜んでいるのです。子どもは嬉しくなり、学習に対する達成感を味わっていました。

個に応じた内容の学習や指導については、学校教育でも大切にしているところですが、学習条件の違いから、かまてらのように進められないことは多々あります。そこに、かまてらのよさを感じました。また、子どもたちは、かまてら先生から算数を学ぶだけでなく、温かい気持ちを受け取り、人とつながる喜びももらっています。子どもたちはかまてら先生に慣れてくると、勉強の合間に自分の好きなことや学校・家族のことなどを楽しそうに話すそうです。また、かまてら先生は、町で子どもに「かまてらせんせい!」と、大きな声であいさつをされたり、何年も経って成長した姿で声をかけられたりすることがあり、とても嬉しいとのことでした。改めて、子どもたちは地域に愛され、育てられていることを実感しました。同時に、地域に喜びを与えられる存在でもあると気付きました。本校には、かまてら以外にも小さな音楽会や釜利谷ほほえみ学園隊など、たくさんのボランティアがあります。地域に支えられていることに感謝すると共に、今後もさらに地域に愛され、地域に喜びを与えられる学校を目指していきます。